OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>宗教者災害支援連絡会編 蓑輪顕量 / 稲場圭信 / 黒崎浩行 / 葛西賢太責任編集『災害支援ハンドブック 宗教者の実践とその協働』
Author(s)	岡本, 仁宏
Citation	宗教と社会貢献. 2016, 6(2), p. 51-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57815
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

宗教者災害支援連絡会編　蓑輪顕量 / 稲場圭信 / 黒﨑浩行 / 葛西賢太責任編集
『災害支援ハンドブック　宗教者の実践とその協働』
春秋社、2016 年 6 月、A5 判、272 頁、2,000 円（税別）

岡本　仁宏*

1. はじめに

第一次と第二次の世界大戦の間を歴史学では「戦間期 interbellum」というが、この言葉に倣って東日本大震災後には「災間期」という時代認識が語られる［仁平 2012; 磯田 2015］。今後も必ず大規模災害が繰り返し起こる。我々は、その合間を生きている。癒しのためには忘却も必要だが、立ち向かうためには記憶が必要だ。活動の記録・分析の努力は、行政によってのみならず、様々な市民社会諸組織においても行われる［岡本 2012］。本書は、その作業の一環である。

阪神淡路大震災の際の宗教者や宗教団体の支援活動の記録としては、国際宗教研究所編 1996、高木 1999、三木編 2001 等がある。東日本大震災については、現在進行形で報告・調査や研究が出つつある。個々の宗派・教団の記録を超えた宗教界全体に目配りしたもののみでも、典型的なものをあげれば、北村 2013、稲場・黒崎編著 2013、中外日報 2011-12、国際宗教研究所 2012-2016、川上 2013、岡本 2013, 2014、三木 2015 等がある。ほかにも様々な貴重な記録や調査があるが、宗教界の活動を全体として把握しようとする取り組みは、非常に不十分である。本書は、宗教者災害支援連絡会（宗援連）という、個別の宗教・宗派を超えた代表的ネットワークの東日本大震災での活動記録となっており、その意味は大きい。

2. 概要

本書の書名は、「ハンドブック」とあるが、内容は、通常のハンドブックではない。宗援連の活動記録、そして若干の理論的議論、今後へ向けての問題提起・提言をまとめたものである。といっても、「活動記録」は、宗援連

* おかもと　まさひろ・関西学院大学法学部・教授・okamotomasahiro@hotmail.com

組織だけではなく、参加した宗教者、個別団体・連合組織の活動記録も含む。第一部は、現場からの報告、第二部は、宗援連に関わった研究者による論考、第三部は、提言と宗援連の記録である。執筆者も多く、内容も多岐に渡っていることから、目次を示しておくことが有益であろう。

総論：蓑輪顕量・稲場圭信
第一部 東日本大震災で起こったこと
はじめに―宗教団体による災害支援に期待すること：渥美公秀
お寺は心のよりどころ―福島県からの避難者一時受け入れを通じて：鈴木悦朗
被災地のまつり復興に向けて：阿部明徳
足湯隊見聞録：辻雅榮
福島と生きる：山本真理子
一被災者として：藤波祥子
苦悩を抱える人々と共にいるということ：金沢豊
被災地に心の栄養をーシャンティの移動図書館活動：茅野俊幸
東日本大震災被災地での支援活動を振り返って―連合組織としての多様性と柔軟性：大滝晃史
ＷＣＲＰ日本委員会の東日本大震災への取り組み：篠原祥哲
東日本大震災以後における全国浄土宗青年会の活動について：東海林良昌
震災で起きたこと：久間泰弘
災害支援担当者への申し送り：西川勢二
おわりに：蓑輪顕量
第二部 東日本大震災から考える
第 1 章　支援を支える信仰とその支援の内容を考える―仏教を一例として：蓑輪顕量
第 2 章　災害と心のケア
第 1 節　災害時の心のケア―東日本大震災復興支援から学んでいること：井上ウィマラ
第 2 節　どのような「心のケア」をどう提供するか：葛西賢太
第 3 章　宗教施設は避難場所になりうるか―行政との連携と災害救援マップ：稲場圭信
第 4 章　「信教の自由と政教分離原則」再考―東日本大震災の経験を通して：

大石眞
第 5 章　原発被災者への支援―被災地の宗教者を中心に：島薗進
第三部 今後への提言―宗援連の経験から
第 1 章　来るべき災害への備え：稲場圭信
第 2 章　防災と宗教―第三回国連防災世界会議における宗教：稲場圭信・黒﨑浩行
第 3 章　宗教者と研究者の新たな連携―東日本大震災支援活動が拓いた地平：島薗進
第 4 章　宗援連の歩み：黒﨑浩行

第一部での個別報告を踏まえ、問題を深めるために、第二部で、宗教者・宗教団体の支援の特性、心のケア、宗教施設、政教分離、原発被災者支援が取り上げられている。他の市民社会組織（つまり NPO）と異なる宗教者の支援にはどのような意味と特質があるのか、精神医学や心理学の専門家ではない宗教者がかかわる「心のケア」の役割とは何か、宗教施設は避難場所となりえるか、支援活動における「政教分離」はいかなる原則であるのか、苦難の深い原発被災者とのかかわりはいかなるものであり得るか、など、問題の奥深さに見合った理論的深化の水準という点では粗密があるとはいえ、宗教界の内外で公論が続けられ今後も実践によって検証されていくべき論点が明示されている。

第三部は、「提言」とされている。稲場は、自治体との災害時協力協定、宗教施設での備蓄、さらに「『防災と宗教』クレド（行動指針）」を紹介する。稲場・黒﨑は、震災後の第三回国連防災世界会議における議論を紹介する。島薗は、宗教者と宗教研究者以外の研究者との連携の展望について、慰霊・追悼、宗教施設、支援活動、宗教・宗派を超えた連携、心の相談室、看取り、「お迎え」現象、「臨床宗教師」について言及する。黒崎の宗援連の記録は、宗教者・宗教団体が、宗教・宗派を超えて連携し調整し、学びあい、さらに外部から学び調整した経験として、重要だ。第三部は、今後各団体で対応を検討する場合に、また社会的に宗教界の動向を踏まえた対応を検討する際の知的インフラとなるものである。

なお、通常の意味でのハンドブックではないとはいえ、「防災と宗教」行動指針の紹介、「サイコロジカルファーストエイド」、「寺院備災ハンドブッ

ク」、「大災害への備え：未来共生災害救援マップ」など、関連のハンドブックなどの情報も掲載されているし、当事者による救援活動での課題・提言（例えば久間、西川の論考）や悩みの報告は次の災害に備える体制を作る際にも参考になる。

3. 評価

宗援連の活動の記録だけであれば、ハンドブックにはならない。本書は、単に一つのネットワーク組織の活動記録のみにとどまらない問題提起を行い、将来の支援活動への手がかりを与えている。

この本書の成立の経緯が、本書に特徴を与えている。

第一に、「宗教・宗派を超えて」（島薗論文）「宗教者」としての災害支援活動の記録と教訓を扱っている。宗援連が開かれた組織であったことから多様な活動者による記録を作ることができた。個々の宗教者の奮闘の記録は、迫力や臨場感がある。読者の共感や学びは論考によって様々であろうが、その多様性そのものが貴重だ。また、宗援連以外にも「連合組織」的特質を持つ報告が多いことも重要な特質である。宗教者にとっては、他宗教・宗派の宗教者の活動記録から学ぶことができる。

第二に、横断的ネットワーク組織の特質とともに、宗援連が研究者を中核としていたこともあって、宗教的・神学的アプローチではなく、宗教者以外との対話に開く形でまとめられていることが重要である。国連防災世界会議での議論などの紹介はその典型である。

阪神淡路大震災の際は、「諸教団はそれぞれが独自に救援活動を展開し、教団の枠を超えた宗教界全体による取り組みにおいて希薄であった」［三木 2012: 253］という点が、東日本大震災の際には、宗援連の活動が代表的事例となって、ある程度克服された。それがマスコミでの取り上げ方の増大にも影響したこと、そしてその背景には SNS などのインターネット利用という技術的基盤とそれを的確に利用した宗援連の手法があったことなども、本書の意義を考える際には不可欠であろう。

他方、これらの特質は、宗教者の支援活動全体の構図を見、理論的課題や提言を議論しようとする場合には、本書に次のような特徴を与えている。

第一に、活発な支援活動を行った人々の報告であり、支援活動を行うより

も、例えば祈りを行ったり、布教活動を行ったり、あるいは何もしなかった多くの宗教者の姿は表れていない（もちろん、［藤田 2013］の指摘する「問題教団」も取り上げられていない）。

第二に、本書では、各宗教・宗派・教団の組織的活動との概要把握は、行われていない。これらは、［稲場・黒崎編著 2013］や各教団等の報告書に詳しいとはいえ、宗教者の支援活動の総括的な把握のためには全体としての、これらの把握の位置づけも必要だろう(1)。

したがって、例えば宗援連で活動した宗教者は、どんな特質をもっていたのか(2)、それぞれの属する教団の中でこれらの活動はどのように位置づけられ評価されていたのか、などの問いは、十分に答えられていない。

さらに言えば、宗教者全体・宗教界は市民社会の震災支援の営みのなかでどのような役割を果たしたのか、その中で宗援連はどのような位置を持ち、どんな相互作用を各宗教・宗派の活動と持ちえたのか、などという問題は、個別的には垣間見えるとはいえ全体としては見えてこない。

第三に、本書は、世俗的 NPO と宗教 NPO=宗教団体との支援の差異や「政教分離」を考える場合にも、個々の教団や宗派の宗教的活動と異なる次元で「宗教」者・「宗教」団体の共通次元を構想し社会的認知を与えることができるのか、より具体的には宗派横断ネットワーク組織がネットワークを超えて実体的存在価値を持ち得るのか、という問いを、浮かび上がらせているように思える(3)。

これらのことは、宗援連の活動を総括・評価し、さらにより大きく宗教界や社会に対する提言を形成するための作業として、今後、研究として取り組まれるべきことであろう。

とはいえ、本書やその基盤としての宗援連の宗教界や市民社会にとっての実践的意味については、編集者や執筆者は重々承知したうえで、まさに従来の状況にブレイクスルーをもたらさんと取り組み、成果を上げたのである。市民社会セクターや宗教界全体にとっての意義は、来る次の災害の際に必ず実践的に明らかになるといえるだろう。その前に、読んでおくことが必要な書であることは間違いがない。

註

(1) ［三木編 2001］は、阪神淡路の際について「教団は結局、内をむくしかなかった」としたが、東日本大震災では［稲場・黒崎編著 2013］、［岡本 2014］、［三木 2015］では異なった対応があった可能性も示唆されている。この意味では、［稲場・黒崎編著 2013］、［三木 2015］と合わせて読まれることが「ハンドブック」活用するためには必要だろう。

(2) 例えば、震災支援のような「不定期ボランティア」について、「宗教属性」、「宗教熱心度」は有意な相関を持つが、「宗教団体所属」は有意な相関がない、という知見もある［寺沢 2011］。

(3) 「臨床宗教師」はその一つの実験と位置付けられるだろう。宗教団体への信頼性が、国際比較の上で際立って低いというデータ（World Value Survey, JGSS, ［石井 2010］）に関する評価は、概念論をはじめ多様であり得るが、このような意識が一般的だということは、「政教分離」論にせよ「宗教者」の支援における専門性論であれ、議論の前提である。この文脈で、三木が注目する、宗教団体によらない世俗的な「行事」の「濃厚な宗教性」は、宗派に属さない「宗教」性の次元を浮かび上がらせているという点で極めて重要である。

　なお、宗教者がボランティアに「身をやつして」（山折の発言［国際宗教研究所編 2016］と表現されるべきか、本田哲郎［2006］的に、洗礼を受けてクリスチャンの名前を得るよりは苦難に沈む民に対する実践において宗教性が表現されるとするべきか、は、究極的には個々の宗派・教団、個々の宗教者の「社会貢献」に関する位置づけの問題であるだろう。

参考文献

石井研士 2010「日本人はどれくらい宗教団体を信頼しているのか--宗教団体に関する世論調査から」『東洋学術研究』49(2): 254-274。

磯田道史 2015 「東日本大震災４年：「災間」を生きる」『朝日新聞』2015 年 03 月 10 日。

稲場圭信・黒崎浩行編著 2013 『叢書 宗教とソーシャル・キャピタル 4 震災復興と宗教』明石書店。

岡本仁宏 2012 「東日本大震災被災地・者に、市民はどのような支援活動を行ったのか：市民社会の奥深い存在を見出すために」『震災学』7: 48-78。

------ 2013 「中外日報・日本ＮＰＯ学会共同教団アンケート」（上・中・下）『中外日報』2013 年 3 月 9 日（4 全面）、12 日（3 全面）、14 日（3 全面）。

------ 2014「東日本大震災における 18 宗教教団の被災者・地支援活動調査について：調査報告に、若干の考察を加えて」日本 NPO 学会ディスカッション・ペーパー。<http://janpora.org/dparchive/pdf/2014003J.pdf>

川上直哉 2013 「災害時における諸宗教間連携を通して見えてきた現状と課題」 (第 65 回 宗教法学会 シンポジウム「大規模自然災害と宗教法の課題」)『宗教法』

32: 105-128。
北村敏泰 2013 『苦縁：東日本大震災 寄り添う宗教者たち』徳間書店。
国際宗教研究所編／中牧弘允・対馬路人責任編集 1996『阪神大震災と宗教』東方出版。
------ 2012 『現代宗教 2012：特集大災害と文明の転換』秋山書店。
------ 2013 『現代宗教 2013：特集 3.11 後を拓く』秋山書店。
------ 2014 「継続特集 3.11 後を拓く」『現代宗教 2014：特集大災害と文明の転換』。<http://www.iisr.jp/journal/journal2014/>
------ 2015 「継続特集 3.11 後を拓く」『現代宗教 2015』。<http://www.iisr.jp/journal/journal2015/＞
------ 2016 「継続特集 3.11 後を拓く」『現代宗教 2016』。<http://www.iisr.jp/journal/journal2016/>
櫻井義秀 2011 「ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教」『宗教と社会貢献』1(1): 27-51。
高木正朗 1999 『阪神・淡路大震災と宗教教団の対応: 資料』立命館大学災害社会学研究会。
中外日報社 2011-2012 「東日本大震災教団アンケート」（2011.09.08, 2011.09.24, 2011.09.27, 2011.09.29, 2012.09.08, 2012.09.11, 2012.09.13）。<http://www.chugainippoh.co.jp/higashinihon/index.html>
寺沢重法 2011 「現代日本における宗教とボランティア活動 : JGSS（日本版 General Social Surveys）の計量分析から」『日韓次世代学術フォーラム国際学術大会 発表予稿集』8:197-200。 <http://hdl.handle.net/2115/47178>
仁平典宏 2012 「〈災間〉の思考――繰り返す３・１１の日付のために」赤坂憲雄・小熊英二編『「辺境」からはじまる――東京/東北論』明石書店、122-158。
藤田庄市 2013 「大震災　問題教団の内在的論理―宗教的脅迫と社会との精神的断絶」[国際宗教研究所編 2013] 所収。
本田哲郎 2006 『釜ケ崎と福音―神は貧しく小さくされた者と共に』岩波書店。
三木英編著 2001 『復興と宗教：震災後の人と社会を癒すもの』東方出版。
------ 2012a 「記憶と人をつなぎ続ける難しさ―かつての被災地の事例から」[国際宗教研究所編 2012] 所収。
------ 2012b 「阪神淡路大震災被災地における宗教の『当時』と『いま』」『宗教研究』<特集>災禍と宗教 86(2): 421-446。
------ 2015 『宗教と震災：阪神・淡路、東日本のそれから』森話社。